

# 文系大学にみる新入生のパソコン離れ

## - 一般情報教育での7年間のアンケート調査から -

新井正一\*1・小川真里江\*2・吉岡由希子\*1

Email: m.arai@mejiro.ac.jp

\*1: 目白大学社会学部社会情報学科

\*2: 目白大学外国語学部中国語学科

◎Key Words 一般情報教育, パソコンスキル, パソコン離れ

### 1. はじめに

本学の情報教育では、急速に進む情報環境に適確に対応できる人材の育成を目標に、2010年から新たな取り組みを始めている。<sup>(1), (2)</sup> その骨格は、情報の収集、整理、発信の一連のプロセスを実際に体験し、その体験から学びの必要性や興味関心を喚起し、主体的に学ぶことのできる力の育成を目指すことにある。この目標を具体化するために、授業は少人数の演習形式を採用し教師が学生一人一人の顔が見えることで、必要な時にはいつでもコミュニケーションを図れる環境を維持している。また、少人数のクラス編成によって学習者同士が協力し学ぶことができるなど、近年導入が進んでいるアクティブラーニングと呼ばれる学習形態を早い時期から整えてきた。

授業を進めるにあたっては、学期の最終段階で教室のクラスを超えてわかりやすい情報発信をすることを目標に、どんな情報を、どのように集め、どう整理し発信するかをテーマに取り組んでいる。この取り組みの過程の中で、コンピュータやネットワークなどの情報機器操作に必要な知識からアプリケーションの操作方法、さらに、情報発信にあたっての情報倫理を学ぶ。これは学習の最終課題を具体的に示すことで、文系学生にとって断片的になりがちな情報関連の知識を、一つ一つの学びに関連性を持たせながら進めることによって、より知識の定着を高める意図がある。

近年、スマートフォンの普及に伴って学生のパソコン離れが進み、高等教育の現場への影響が顕在化しつつある。また、高等学校の学習指導要領が改訂され、2016年からは新しい教科情報を学んだ学生が入学し、高等教育での対応を検討する時期にある。<sup>(3), (4)</sup> 本学の情報教育でこの7年間一貫して進めてきた教育手法を継続するにあたって、あるいは新たな手法を構築するにあたって、学生のパソコン離れを配慮した対応が必要なのであるか。本報告は、2012年から現在まで7年間の新入生を対象としたアンケート調査を基に、その必要性を検討する。

### 2. アンケート調査

本学の一般基礎教育の必修科目の一つになっている情報活用演習と呼ばれる授業では、同一学科同一時間での開講の利点を活かして、初回の授業でWebアンケートおよび実技テストを実施、その結果に応じて2回目以降のクラス分けを行なっている。1年生は春学期に開講される情報活用演習1を受講するため、入学直後のタイミングでのアンケートになる。その内容は、高校時代の教科情報

への興味、受講姿勢、自宅での情報機器の環境および使用状況、学習意欲、情報に関する一般的知識など多岐にわたり、択一式および自由記述を含む記名形式で構成されている。また、タイピングおよびワード、エクセルを使ったアプリケーション操作能力についても調査し、クラス分けの指標としている。このアンケートは必修授業のクラス分け資料となるため全員が回答し、その人数は2012年から2018年の7年間の合計は約7000名に達する。なお、分析にあたっては無回答や明らかな誤りを事前に取り除いている。

7年間の長期に渡るアンケートでは、毎年質問の順番および質問数の若干の変更を加えているが、内容について的大幅な変更はない。本年4月に実施された例では、はじめに指定されたタイピング練習サイトにアクセスしタイピング能力を計測し自己申告する。次に、学習に対する姿勢を測るための択一式の質問20問、その後、高校時代の教科情報の授業への興味・関心、授業への取り組みの姿勢、自宅のパソコン環境およびofficeソフトの操作の自信およびSNSの利用頻度の10問、続いて情報ネットワークに関する社会問題をテーマとした穴埋め問題5問、最後に情報の授業を受講するにあたっての要望を自由記述の形式で尋ねている。Webアンケートに答えた後、見本として提示された『歩きスマホ防止』のポスターを作成する。作成にあたっては、歩きスマホによる事故件数データの表作成および経年変化のグラフ作成能力を測っている。回答時間はポスターの作成を含めて60分であったため、操作の不慣れな学生によっては、最後に課せられたポスターの作成に時間が不足して未完成のケースが見受けられた。

### 3. 結果

授業での活用を前提としているパソコンを日常どの程度使っていたのかを調査する目的で、『日頃、あなたはどの程度パソコンを利用しますか』の質問に対して『ほとんど使わない、月に1日程度、週に1日程度、週に3、4日程度、毎日』の5つの選択肢を設定し尋ねた。図1は、『ほとんど使わない』と『月1日程度』を選択した人数を加えたものと、『毎日』と回答した人数の各調査年の回答者数に対する比率の経年変化である。この図からパソコンをほとんど使わない者が年々増加し、2018年には受講学生の70%に達していることが分かる。一方、毎日使っている学生についても、年々減少しこの7年間で約15%低下し、パソコン離れが進んでいることを示している。

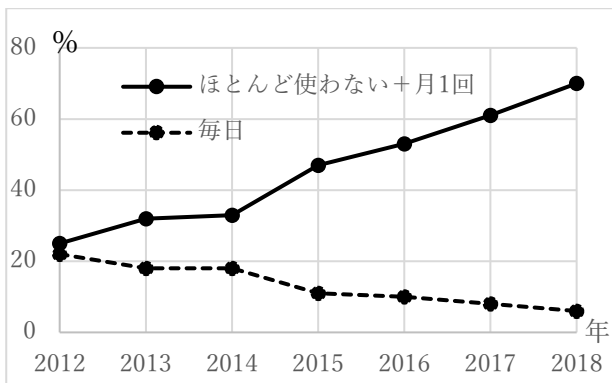


図1 パソコン利用の経年変化

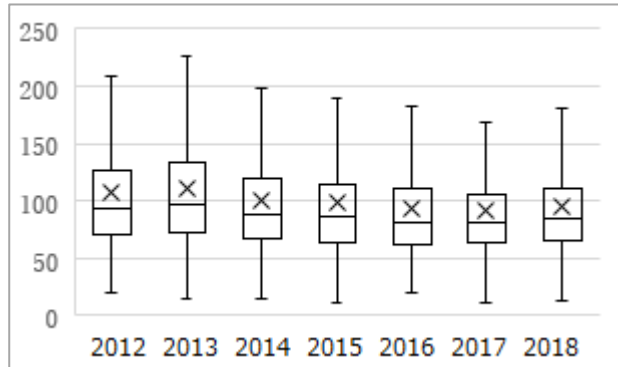


図2 タイピングスコアの経年変化

パソコン離れが進むことで、パソコンの操作能力の低下が予想される。図2は、操作能力の指標の一つと考えられるタイピングスコアの経年変化である。この図から、平均点の減少傾向が認められるが、中央値以下の変化に大きな傾向が認められない。その一方で、高得点者の減少傾向が著しく、パソコンを毎日触れる人の減少が平均値の低下を招いている大きな要因となっていることが推察される。このことは、2018年についてのパソコンの利用頻度とタイピングのスコアの関係(図3)からも明らかであろう。

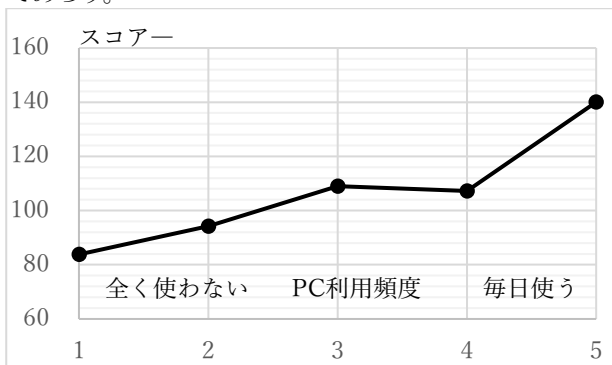


図3 パソコンの利用頻度とタイピングスコア

図4は、大学での学習の中でレポート作成に使われることが予想される Office アプリケーションの操作に対する苦手意識を4段階で尋ねたもので、質問の選択肢の『とても苦手』と『苦手』に分類される人数の経年変化を示している。この数年は苦手に分類される者がおおよそ80%に達しているが、7年前の状況と大きな差はないと判断している。情報の授業に望む自由記述欄には、2012年当初から Office アプリケーションの操作能力の向上を期待する声が多く、この数年、特に増加傾向が認められることで

はない。入学直後の多くの学生にとって、情報演習=Office アプリケーションの操作との印象が強いことの反映ではないであろうか。

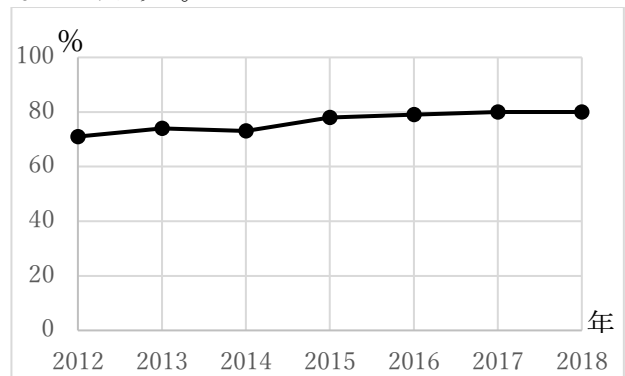


図4 Officeの苦手意識の経年変化

#### 4. おわりに

図5は学期末に実施される授業の満足度を尋ねた結果である。2012年を除き満足度は約80%に達し、学習意欲を損なうことなく授業を展開できた結果と思われ、パソコン離れによるスキル低下によって、授業についていけない、あるいは学習意欲が失われた学生は数少ないように推察される。これは、授業担当者の指導力のみならず、学生を取り巻く情報環境が7年前のスキルが低い状況とは異なっていることが想像される。生まれた時からデジタル機器に囲まれ育った環境は、単純な操作に対する習得は想像以上に早い。パソコンに触れる機会を提供すること、そして、やる気を喚起と維持することで操作スキルの低下を補うことが可能ではないであろうか。今後、継続して調査を進める必要がある。

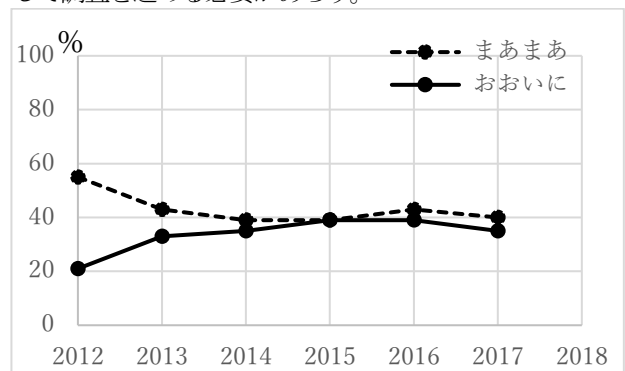


図5 授業満足度の経年変化

#### 参考文献

- (1) 新井 正一・吉岡 由希子・川口 央・小川 真里江：“目白大学における基礎教育科目としての情報教育の新たな試み”，2011PCカンファレンス論文集，pp.122-123(2011)
- (2) 新井 正一・吉岡 由希子・川口 央・小川 真里江：“一般情報教育科目での授業クラスを超えた相互評価の試み”，2012PCカンファレンス論文集，pp.200-204(2012)
- (3) 松山 智恵子・中島 豊四郎：“新入学生の情報リテラシー力の推移(その2)―平成24年度～平成28年度の新入学生の情報リテラシーに関する調査から―”，椋山女学園大学研究論集，第48号(自然科学篇)(2017)
- (4) 篠 政 行：“文科系2大学における2017年度入学生の情報教育の履修に関する意識調査”，駒沢女子大学研究紀要第24号 p.201～209(2017)